

把酒問月 李白

唯願當歌對酒時	古人今人若流水	今人不見古時月	白兔搗藥秋復春	但見宵從海上來	皎如飛鏡臨丹闕	人攀明月不可得	青天有月來幾時	我今停杯一問之
月光長照金樽裏	共看明月皆如此	今月曾經照古人	姮娥孤棲與誰隣	寧知曉向雲間沒	綠煙滅盡清輝發	月行却與人相隨	我今停杯一問之	

(古文真宝)

【書き下し文】

青天月有りて来幾時ぞ
我今杯を停めて一たび之に問はん
人明月を攀ちんとするも得べからず
月行却つて人と相隨ふ
皎として飛鏡の丹闕に臨むがごとく
緑煙滅び尽きて清輝発す
但だ見る宵に海上より来たるを
寧ぞ知らん暁に雲間に向かひて没するを
白兔薬を搗きて秋復た春
姮娥独り棲みて誰とか隣りせん
今の人は見ず古時の月
今の月は曾經て古人を照らす
古人今人は流水のごとく
共に明月を看ること皆此くのごとし
唯だ願ふ歌に当たり酒に対するの時
月光長へに金樽の裏を照らさんことを

【口語訳】

酒杯を手にして月に問いかける

青い夜空に月が現れてから、どれほどの年月がたったのであろうか。
私はいま杯を口もとにはこぶ手をとめて、ちよつと月にたずねてみる。
人が明月に手を伸ばして引き寄せてみようとしても、それはできない。
（だが、）月は（人間の思いにはかかわりなく、）なんと人のあとからついてくる。
その広く輝く光は、まるで朱塗りの宮門の上にさしかかった空飛ぶ鏡のよう。
濃い夕もやが消え去ると、その清らかな光が輝きわたる。
（だが人々は）ただ夜も浅いころ、月が海上からのぼってくるのを目にするばかり。
そして少しも気づかぬうちに、明け方、月は雲間に沈んでしまうのだ。
（月に住む）白いうさぎは、秋から春へと、（いつまでも）薬をつき続け、
（月に住む仙女の）姮娥は（夫と別れて）一人住まい、いったい誰と隣りあわせに住むのだろうか。

今の人々は、昔の月を見ることはできないが、

今輝いている月は、以前昔の人々を照らしてきた（同じその月なのだ）。

昔の人も今の人も流れる水のように、（生まれ、刻々と変わり、やがて死んで）入れかわっていきが、

（昔の人、今の人、どちらも）みな、このように同じ月をながめたのだ。

私はただひたすら願う、歌をうたって酒を飲む時、

月の光がとこしえに、黄金の酒だるの中までも照らしていてくれることを。